



LAMPIRAN

Lampiran 1. Contoh penggunaan idiom *hiza* dalam kalimat

No	Contoh Kalimat	Media/Genre	Judul	Penulis	Tahun Publikasi
1.	お品が浴衣姿で出て来る。「どうぞ、ごゆっくり」と言ってお品は膳の前に <u>膝を崩</u> して <u>坐</u> った。浴衣は身幅が狭い。それで膝小僧が出て来る。「しとやかな女が好きなんで	書籍/9 文学	富札を斬る	峰 隆一郎 (著)	2001
2.	わめきが波のように次から次へと広がった。 <u>立ち上がることは控えても、詰め寄るように膝を進める</u> 者が大勢いた。「愚かな！」 「それが一国を統治なさるお方が、申されることにご	書籍/9 文学	黒船擾乱	笹沢 左保 (著)	2002
3.	野趣とを感じさせた。「いやあ、大した仔犬でござんすね。全く、素晴らしい」と島村は <u>膝を乗り出</u> しながら仔犬を眺め、それから須崎をふり返って言った。「ぜひ、この仔犬、譲って	書籍/9 文学	犬バカものがたり	近藤 啓太郎 (著)	1988
4.	シャツの端を掴んでいる。「それで、相談って？」 士郎が切り出して、志木子は <u>膝を正</u> した。 <u>こんな時、きちんと順序だてて話をしなくてはならないことはわかっている。そ</u>	雑誌/教育・学芸/文学/芸術	小説新潮	唯川 恵 (著)	2002

5.	喜左次は羽玉のあばら家に、二刻近くもいた。 <u>行燈の油が切れて、真っ暗な部屋でじっと膝を抱えていた。</u> 恐怖は潮が引くように消えた。 <u>お弁のあの顔がここにな</u> <u>い、と思うだけで、</u>	書籍/9 文学	水に映る	柏田 道夫 (著)	2002
6.	、向こう脛を蹴り上げた。 <u>すると三階のパジ・チョゴリも、がばつと立ち上がり、相手の膝を抱えて</u> <u>ふたたび哀願しようとした。</u> 「嘘じゃありません。俺は死んではいけないのです。」	書籍/9 文学	南のひと北のひと	李 浩哲 (著)/ 姜 尚求(訳)	2000
7.	きたときには気づかなかったが、掌にバンドエイドが貼ってあった。 <u>希生はソファの上で膝を抱えるようにしてテレビに食いいつて</u> <u>る。思い出したように井に箸を伸ばしている。</u> 会話	書籍/9 文学	虚の王	馳 星周 (著)	2000
8.	り巻きの連中を連れてセドナにやってくる。 <u>たぶんスポーツ用品以外についても、二人で膝を突き合</u> <u>わせて話をする機会があるだろう。</u> リュークは裸のまま大きなドレッサーの一番上の引き出	書籍/9 文学	野蛮な誘惑	Drew Jennifer.(著) / 古川 倫子(訳)	2003
9.	とした。 <u>〈そうだ。機械弓だ。引きしぼるのには、大きな滑車を使えばいい〉</u> 信長は <u>膝を打っ</u>	書籍/9 文学	織田信長	畑山 博 (著)	1998

	た。 <u>さっそく羽柴秀吉が呼ばれ、青図面が渡された。信長はそれを明け方にはもう書き</u>				
10.	た。再び銃声。 <u>足と足の間に銃弾が撃ちこまれ、浜本は中腰のまま、動けなくなった。膝が笑っている。「そのまま動くな」スペイン語のくもった声がいった。「訊きたいことが</u>	書籍/9 文学	ファイナル・ゼロ	鳴海 章 (著)	1995
11.	か、 <u>どうせ死ぬなら自由の身で死のう、激しく闘いぬいて死のう、どんなことがあっても膝を屈しないために...私の頭をいためていたのは、ただひとつその考えだったのです。</u> トーコ	書籍/9 文学	最初の教師・母なる大地	チンギス・アイトマー トフ(著)/ 赤沼 弘(訳)	1990
12.	ヤンパンのボトルが一本。 <u>「喉渴いただろう。...どうぞ」</u> まるで、騎士が姫君の前で <u>膝を折る</u> ように、優雅な所作で礼をとって <u>彼は僕をソファに導いた。...ちくしょ、本当に何やつ</u>	書籍/9 文学	ワイルド・ローズ	藤原 万璃子(著)	2002

13.	三発と腹に受け、次に股間に蹴りがきた。 <u>下半身を捻ることで、急所はかわした。私は膝を折った。立っていた方が、急所は護りにくい。特に相手が二人以上の場合はそうだ。転げ回</u>	書籍/9 文学	罇・街の詩	北方 謙三 (著)	2001
14.	全部現われている。 <u>いや、何を話す時も水見の声には情緒というものが無い。深代は片膝を折って、長いその片足ごとベンチに座った。自然と、半身を水見に向ける姿勢となる。そ</u>	書籍/9 文学	Call me	花郎 藤子 (著)	1993
15.	こと、部屋の仕切りである。 <u>御座の間と次の間には敷居は設けず、百姓・町人の別なく、膝を交えて話のできるようにという配慮が働いている。庭前の池は、「心字の池」といい、表の</u>	書籍/2 歴史	郷土資料事典	実著者不明	1997
16.	で言った。少ししゃんとした声だった。 <u>彼は空のコップをぽんとカウンターに伏せると、膝を組み、紙をひとふりして緒方のほうをまっすぐみつめた。「おれの意見をいわせてもら</u>	書籍/9 文学	青春の門	五木 寛之 (著)	1990